

青年心理学

テキストブック心理学(5)

藤永保・三宅和夫・山下栄一 編
依田明・空井健三・伊沢秀而



＊ 教職を志望する方々に贈る基礎体系書 ＊

教育にかかわる心理学の理論を，熟達の執筆陣が，平易・簡潔に整理した。授業や学習の指導に現代心理学の知識を生かすための最適のシリーズである。本巻は，青年期の全般的特徴と人格形成の過程を描いた2部構成。



青年心理学

テキストブック心理学(5)

藤永保・三宅和夫・山下栄一 編
依田明・空井健三・伊沢秀而



有斐閣ブックス



青年心理学

テキストブック心理学(5)

〈有斐閣ブックス〉

昭和53年10月10日 初版第1刷印刷

昭和53年10月20日 初版第1刷発行

¥ 1,100.

編者

ふじ 藤
み 三
やま 山
よ 依
そら 空
い 伊

なが 永
やけ 宅
した 下
だ 田
い 井
ざわ 沢

かず 和
えい 栄
けん 健
しゅう 秀

たもつ 保
お 夫
いち 一
あきら 明
ぞう 三
じ 而

発行者

え 江

くさ 草

ただ 忠

おつ 允

発行所

株式会社 有 斐 閣

東京都千代田区神田神保町2-17
電話 東京(264) 1311(大代表)
郵便番号 [101] 振替口座東京 6-370 番
本郷支店 [113] 文京区東京大学正門前
京都支店 [606] 左京区田中門前町44

印刷 内外印刷株式会社
製本 新日本製本株式会社

©1978, 藤永 保・三宅和夫・山下榮一 Printed in Japan
依田 明・空井健三・伊沢秀而.

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

1311-083450-8611

は し が き

■ ここに、《テキストブック心理学》として全8冊のシリーズを世に送ることとなった。今日、心理学に関する入門書、概説書のたぐいは書店の棚にあふれんばかりであるから、そのうえにこのようなシリーズを編むことは、屋上屋を架する観を与えるかもしれない。

しかし、近年の心理学は、一種の転換期と形容してもよいほどに、探究の視点においても技法の面でも、さまざまな変革が著しい。新しい見地からの実証的資料の獲得に伴って、かつて絶対とされた諸学説が否認されるものもある一方では、捨てられたはずの見解の再確認されるものも少なしとはしない。とくに、発達研究を主軸とする広義の教育心理学の分野において、この機運はまことに著しいものがあるといえよう。その意味で、将来の探究のあり方への正しいみとおしが、初学の読者にとっても、これほど必要とされる状況はかつてなかったといっても過言ではない。

本シリーズの構成は、一見して知られるとおり、必ずしも心理学の全分野をおおうものではない。人間の発達・学習・教育・再学習あるいは自己形成という見地から、現代心理学のみいだした知見をなるべく平易、簡潔に体系化しようとい図するものである。上述の趣旨にしたがい、事象を網羅的に記述するというよりは、教育に関心を抱く初学者、なかでも、将来幼小中高の教職につこうと望む学生、教育にかかわる心理学的問題について知識を整理しようと望む人々などに対して、今後の心理学がこの分野でどの方向をめざそうとしているか、解決を要する問題とは何か、どのような探究を進めるべきかなどについて、示唆がえられることを期待している。関連する各巻を通観することによって、さらに洞察を深められるならまことに幸いである。

■ 本書は、《テキストブック心理学》の第5分冊として編集された。すでに刊行されている第3分冊〈乳幼児心理学〉、第4分冊〈児童心理学〉とともに、発達心理学を構成するものとして位置づけることができるであろう。

ただ、同じく人間の成長・発達の一時期を扱う心理学といっても、青年心理学は、乳幼児心理学や児童心理学とは研究の観点も方法もかなり異なっている。青年期の心理を研究しようとする場合、どうしても成長しつつある個人の自己意識のあり方を解明していくことが中心的な課題となってくるからである。

そのような事情から、本書の編集にあたって、現に青年期にある人自身の自己理解に資するような、心理学的知見を提供していくという観点で、内容の配列を考えてみた。

まず全体を2部に分けたが、第Ⅰ部では、日本の青年心理学の研究者に影響の大きかった青年期に関する主な理論を紹介しながら、青年期の特徴と発達の意義を、大づかみに素描してみることを試みた。教職科目の教育心理学の一環として青年心理を扱われるような場合、第Ⅰ部のみを参照していただいてもよいと思う。

第Ⅱ部は、いわば各論にあたるわけであるが、ほぼ青年期の初めから終わりにいたる自己形成の過程をたどっていけるように、主題を選んである。

執筆にあたられたのは、青年心理の研究の第一線で活躍しておられる方々ばかりであり、ご多忙の中を快くご協力くださったことに、編者として深く感謝申し上げたい。

本書を読まれる若い読者の方々が、自己理解を深めていくための何らかの示唆を、本書から汲みとっていただくことができれば、まことに幸いである。

1978年9月

山下 栄一

目 次

I 青年期の全般的特徴	1
第1章 青年期のとらえ方	2
1-1 青年期とはどういう時期か	2
発達段階(2) 青年期とは何か(3)	
1-2 青年期をとらえる立場	3
生物学的立場(3) 社会学的立場(4) 総合的な見方(5) 人格 再構成の時期(5)	
1-3 青年期の始まりと終わり	6
青年期の始まり(6) 青年期の終わり(7) 社会制度の影響(8) ひきのばされる青年期(9) [参考書](10)	
第2章 青年期の基本的特徴	11
2-1 第2の誕生	11
了解心理学(11) 青年期の心理の全体的特徴(12) 自我の発見(13) 生活設計が次第に成立すること(14) 個々の生活領域に進み入ること (14)	
2-2 過渡期としての青年期	15
場理論(15) 所属集団の変化(15) 時間的展望の変化(16) 境界 人としての青年(17) 青年期の特徴(17)	
2-3 同一性をめぐる葛藤	18
精神分析的自我心理学(18) 同一化と同一性(19) 自我同一性の感 覚(20) 同一性の拡散(21) 否定的同一性(21) [参考書](22)	
第3章 青年期の発達の意義	23
3-1 人間の生涯と発達課題	23

iv 目 次

発達二つの考え方(23)	発達課題の意義(24)	発達の漸成説(24)
人生周期と発達課題(25)	人格(自我)の強さ(25)	
3-2	青年期の発達と発達課題	27
心理的離乳(27)	依存と独立の葛藤(27)	青年期の発達課題(28)
ハヴィガーストの説(29)	病理法から見た青年期の課題(29)	エリクソンの自我同一性(31)
心理・社会的モラトリアム(31)		
3-3	人格の成熟	32
成熟した人格(32)	成熟した人格の特性(33)	
[参考書](34)		

II 青年期の人格形成

第4章 自己へのめざめ

4-1	自己についての新たな体験	36
自他未分化(36)	外に向かう関心(37)	自他の分化(37)
4-2	孤独感と憧憬	38
孤独感(38)	不満といらだち(39)	憧 憬(42)
4-3	自己発見の試み	45
自己像をさぐる(45)	劣等感と自己嫌悪(45)	
[参考書](46)		

第5章 青年と性

5-1	第2次性徴と性意識	47
第2次性徴の発現(47)	第2次性徴にともなう「体感」の変化(49)	
性的なものへの強い関心(49)		
5-2	性行動と性のモラル	51
現代青年の性行動(51)	性のモラル(52)	
5-3	性役割と性同一性	54
性役割の意味(54)	性役割の形成(55)	性同一性の確立(56)
[参考書](57)		

第6章 青年と社会

6-1	社会の中の青年期	59
青年期の歴史性(59)	ひきのばされた青年期(60)	

6-2	社会意識の発達	62
	社会への自覚と意識(62) 社会問題への関心の芽ばえ(63) 社会的態度(64)	
6-3	青年の社会参加	69
	集団所属・青年運動(69) [参考書](70)	
第7章	葛藤する自己	71
7-1	反抗と抵抗	71
	うっ積する不満(71) ゆれ動く気分(72) 反抗の諸形態(72) 反抗と抵抗(75)	
7-2	自己同一性とその拡散	76
	同一化と同一性(76) 「本当の自分」を見失う(78)	
7-3	不安と罪責	79
	不安の意味(79) 不安よりの逃避(80) 深層にひそむ罪意識(82) [参考書](83)	
第8章	青年とノイローゼ	85
8-1	危機としての青年期	85
	危機ということ(85) 青年期危機の問題(86) 挫折や崩壊の時(86)	
8-2	適応障害と青年期	88
	適応障害ということ(88) 青年期にみられる精神病理像(89)	
8-3	適応障害とカウンセリング	94
	挫折や崩壊に悩む私や仲間との出会い(94) カウンセリングの視点(94) [参考書](96)	
第9章	青年と非行	97
9-1	「非行」の意味	97
9-2	青年期における非行の意義	98
	発達と非行(98) 青少年非行の最近の傾向(99)	
9-3	現代の非行を理解する視点	100
	心理的側面を重視するアプローチ(100) 社会的側面を重視するアプ	

ローチ(101)	
9-4 非行の予測と指導	103
非行予測の目的(103) 予測の方法(103) 非行の発見と指導(104)	
9-5 非行の予防	106
家庭環境と非行(106) 自己形成と非行(107) 地域環境と非行(107)	
[参考書](108)	
第10章 青年の対人関係	109
10-1 親子関係と心理的離乳	109
青年の親子関係の特徴(109) 親子間の葛藤(110) 情緒的自立へ(112)	
10-2 教師との関係	113
青年期における学校の意義(113) 生徒のみる教師像(114) 教師-生徒関係(116)	
10-3 友人関係	117
友人関係の意義(117) 友人関係のタイプ(118) 異性との関係(119)	
[参考書](119)	
第11章 学業と職業	121
11-1 学校生活と受験体制	121
進学・就職の実態(121) 学歴観(121) 進学・就職のもつ意味(122)	
11-2 青年の悩み	123
満足感(123) 生きがいの対象(124) 悩みの具体的内容(124)	
青年期の長期化・価値の多様化と悩み(125)	
11-3 進路選択	126
学業観(127) 職業観(129)	
[参考書](131)	
第12章 青年と余暇	133
12-1 余暇への要求	133
労働と余暇(133) 労働の疎外(134) 余暇への傾斜(135)	
12-2 現代青年の余暇生活	137
生活時間(137) 青年の生活時間(138) 余暇の使われ方(139)	

12-3 余暇とユース・カルチャーと遊び	141
ユース・カルチャー(141) カイヨワの遊びの理論(141) 余暇と気 ばらし(142) 気ばらしと実存の空虚(144)	
12-4 人間の生活と余暇	144
現代における余暇の役割(144) 個性の拡大(145) 〔参考書〕(146)	
第 13 章 「生きがい」を求めて	147
13-1 生きがい感喪失の状況	147
「生きがい」論の時代的背景(147) 「生きがい」の意味(148) 「生き がい感」喪失の状況(149)	
13-2 現代青年の生きがい感	150
青年の生活感情——「青年期感傷性」(150) 生きることのむなしさ (151) 現代青年の無気力・無感動(152)	
13-3 生きがい感と生活態度	155
フラストレーションと苦悩(155) 生きる意味への問い(155) 人間 の責任性存在——「態度価値」(156) 〔参考書〕(157)	
第 14 章 価値観の形成	159
14-1 価値意識と同一性	159
同一性確立の条件(159) 価値と生活感情(160) 規範意識と価値観 (162)	
14-2 現代青年の価値意識	163
価値の類型(163) モリスの類型(164) 規範意識と価値の根拠(165)	
14-3 価値観の形成	166
未成熟な価値意識(166) 価値観の成熟した形態(168) 価値観の形 成過程(169) 〔参考書〕(171)	
第 15 章 自己の確立へ	173
15-1 激動から安定へ	173
内面の激動がしずまる(173) 自信がついてくる(174) 現実認識の 深まり(174)	

15-2 本当の自分を見いだす 175

「自分の役割」を模索する(175) 自分らしい生き方(176) 新たな
模範の発見(177)

15-3 自己責任の意識 178

自由の意識の増大(178) 自己を受容する(179) 決断できるという
こと(180) 自己責任の意識(181)
[参考書](182)

■ トピックス

両性性に関する研究(58) 登校拒否と母子関係(84) 友人に対する
情操(120) M. シェーラーの価値序列の規準(172)

索引 183

執筆者および執筆分担

山下 栄 一 (やました えいいち)	関西大学文学部教授	第 1, 2, 10, 15 章
返 田 健 (そりた たけし)	岐阜大学教養部教授	第 3, 12 章
原 田 茂 (はらだ しげる)	東京理科大学理学部教授	第 4 章
福 富 護 (ふくとみ まもる)	東京学芸大学教育学部助教授	第 5 章
秋 葉 英 則 (あきば ひでのり)	大阪教育大学教育学部助教授	第 6 章
古 沢 頼 雄 (こさわ よりお)	日本女子大学家政学部教授	第 7 章
田 畑 治 (たばた おさむ)	名古屋大学教育学部助教授	第 8 章
松 本 恒 之 (まつもと つねゆき)	東洋大学文学部助教授	第 9 章
竹 田 ア ミ オ (たけだ あみお)	青年心理学研究会	第 10 章
渡 辺 恵 子 (わたなべ けいこ)	神奈川大学外国語学部助教授	第 11 章
五 味 義 夫 (ごみ よしお)	青年心理学研究会	第 13, 14 章

I 青年期の全般的特徴

////////////////////////////////////
第 I 部は、青年期の心理の全般的な特徴を
まず大づかみに記述してみるのがねらいである。

心理学では青年期というものをどのように
とらえるのか、にはじまって、第 2、第 3 章
では、青年心理学の重要な理論のいくつかを
紹介しながら、青年期の心理にみられる基本
的特徴、ならびに人間の生涯において、青年
期がどのような意義をもっているのかを概説
している。

第1章 青年期のとらえ方

1-1 青年期とはどういう時期か

■ 発達段階

青年心理学とは、文字通りにみれば、青年について心理学的に研究する個別科学という意味であるが、では、そこにいう青年とはどういうものなのであろうか。

日常生活で青年ということばがどう使われているかを考えてみると、ずいぶんいろいろな場合のあることに気づく。40歳になろうという人でも、政界などでは青年政治家などといわれているかと思うと、一方では、20歳になればもうおとな（成人）だともいわれている。青年政治家といった用い方にも示されているように、常識的な用法としての青年は、相対的な意味でいわれていることが多いようである。つまり何歳から何歳という一定の時期というよりは、むしろ、それぞれの領域で、比較的若い方の人たち、それだけに可能性に富んでいるが、まだ十分な完成に達していない人という意味がこめられているのである。

このような常識的な用法に対し、心理学の方でいう青年とは、人間の成長・発達における一定の時期にある人をいうのである。成長・発達の過程はこまかく見ていくと切れ目なく続いているもの、つまり連続的な過程といえるが、誕生からおとなにいたる全体を通して大づかみに見ると、そこにいくつかの特徴的な時期を区別してみることができる。

たとえば0歳の乳児と3歳の幼児では、同じく子どもといっても大きな違いがある。3歳児と8歳児をくらべてもそうである。その違いはたしかに、一面では体の大きさが著しく大きくなっているというように量的な違いであるが、それとともに、心のはたらし、行動の仕方という質的な面についても著しい違いがみられるのである。つまり発達とは量的な変化のみでなく、質的な変化の

過程でもある。この質的变化に注目していくと、発達過程をいくつかの段階に分けてみるのが可能となる。これを発達段階とよんでいる。そうすると、心理学の方でいう青年とは、発達段階の一つとしての青年期にある人間というようにとらえられる。

■ 青年期とは何か

われわれが発達というものを考えていくとき、暗黙のうちにふまえているのは、おとな（成人）と子どもという対比である。人間として一応できあがった状態であるおとなというものに対して、いろいろな面でおとなとしての特質を欠いた未熟な存在としての子どもというものが、自明のものとしてとらえられている。常識的にいえば、発達とは子どもが次第におとなになっていくことなのである。

もちろん子どもといっても、決して同じではなく、こまかくいえば、乳児期、幼児期、児童期などがさらに区別される。乳児期はだいたい最初の1年半から2年ぐらい、それから5～6歳頃までが幼児期といわれる。以後11～12歳頃までをふつう児童期といっている。児童期を終えれば、子ども時代は終わりを告げるわけだが、問題は、子ども時代が終わればそれですぐにおとなになるのかということである。誰もが気づいているように、子ども時代が終わればただちにおとなになるとはいえない。しばらくの間、子どもからおとなへの移行の時期が認められる。青年期というのは、まさにこのような子どもからおとなへの移行の時期をいうのである。

そのような発達過程における一段階としての青年期には、児童期までの子どもにみられるものとはずいぶん違った、移行期としてのさまざまな特徴がみられる。青年心理学は、そういう子どもからおとなへの移行期にあらわれる心理的な特徴を明らかにしていこうとするのである。

1-2 青年期をとらえる立場

■ 生物学的立場

青年心理学は、青年期に特徴的な心理を解明していこうとするのであるが、そもそも、青年期に特有のさまざまな現象というものは、どういう事情から生ずるのであろうか。この点について青年心理学の歴史をふりかえてみると、

いくつかの考え方がとなえられてきたことがわかる。その一つは、生物学的立場とよばれているものである。

人間はその身体の構造からすれば、誕生の時点ですでに男女の別ははっきりしている。しかし本来の性に結びついた機能、つまり性殖能力という点では、男性あるいは女性としてののはたらきはまだあらわれていない。それゆえ、乳・幼児から児童期までのいわゆる子ども時代には、体つきなども、男児と女児でそれほどはっきりした違いはみられない。ところが、人によって早い遅いの違いはかなりあるにしても、だいたい11～12歳から14～15歳にかけての頃、急激な変化があらわれる。女子なら月経の開始、男子なら精通の現象がそれである。それにともなって女子なら胸が隆起し、乳房が大きくなってくると、皮下脂肪がついて体つきが丸やかになってくると、女性らしい特徴がはっきりしてくる。男子なら声がわりがし、肩幅が広くなるなどの男性らしい特徴があらわれる。これらは性腺の活動が活発になってきたことによって生ずる一連の変化だと考えられるが、誕生時ですでに認められる女性なり男性なりの基本的特徴と区別して、「第2次性徴」とよばれている。

生物学的立場に立つ人々は、自我意識の高揚、感情の不安定さなどという青年期に特有の現象は、もっぱらこのような生理的变化といういわば生物学的要因から生ずるものと考えるのである。性腺の活動が活発化しそれにともなって身体のさまざまな面で急激な変化が起こり、これが心の面にも著しい影響を与えていることは否定できない。問題はそうした生物学的要因のみによって、青年期の現象はすべて説明されるのかということである。

■ 社会学的立場

青年期というものがもっぱら生物学的要因によって生ずるものとするなら、青年期の現象というのはおよそ人間である以上、いつ、どこでもほぼ似たような形で認められるはずだと考えられる。ところが文化人類学者たちは、未開種族の社会を実地に調査してみたとき、青年心理学者がいうような青年期という特別の時期はほとんど認められない場合もあることを発見した（M. ミードのサモアにおける調査研究はその代表的な例である）。さらにはまた同じ地域で考えてみても、時代によって青年期のあらわれ方は異なっている。たとえば、日本というなら、江戸時代ぐらいまでは、現在とくらべてみると、子どもからおとな

への移行の時期はずっと短いものであったと考えられる。

このようなことから、青年期というものは、生物学的要因によって生ずるのではなく、むしろ、文化的・社会的要因によって生ずるのだとする見方があらわれてきた。つまり、子どもからおとなへの移行期としての青年期というものが、人間の生涯における一つの特別な時期として出現するのは、もっぱら文化のあり方や、社会の仕組みなどの条件によるのだとする見方である。これを前記の生物学的立場に対して、便宜上、社会学的立場とよんでおくことにしよう。

■ 総合的な見方

青年期に特有の現象が文化的・社会的条件に規定されるということを指摘したのは、社会学的立場のすぐれた貢献であった。しかし、青年期という現象をすべて社会的条件のみから生ずるとみて、生物的要因を認めようとしないのは、やはりゆきすぎといわねばならない。とらわれない眼で青年期の現象をみていくと、生物学的立場も社会学的立場も、ともに一面的なとらえ方でしかないことに気づく。青年期というものは、その一面において、性腺の活動の活発化というような成長にともなって生ずる生物的・生理的变化が土台となっていることは否定しえない。と同時に、そのような身体面の変化にともなう心理的变化が、具体的にどのような形であらわれるかは、個人のおかれている文化的・社会的条件に大きく規定されている。社会の仕組みが複雑となり、社会的地位をめぐる競争が激しいような社会では、青年期の心理的不安定さはそれだけ一層著しくなるであろうし、青年期そのものが、ひきのばされる傾向もでてくるのである。

このようにみてくると、青年期という現象は、生物的要因と社会的要因の両方に規定されて生ずるものと考えられる。したがって青年期というものをとらえる立場としては、生物学的立場と社会学的立場のどちらにも偏らない、両者を総合した見方が要求されてくる。このような理由から、近年の青年心理学者は、だいたいにおいて、生物・社会的見地ともいうべき総合的な見方をとるようになっている。

■ 人格再構成の時期

第2次性徴の発現という現象は、身体のはたらきという点で、もはや子どもではなくなったことを示している。それはいわば生物としての個人のおかれて